

---

# 一週間

坂田火魯志

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

一週間

### 【Nコード】

N6624K

### 【作者名】

坂田火魯志

### 【あらすじ】

一週間の有給休暇を手に入れた優里亜。その一週間で何をするかかなり悩んで。日常の中のお話です。

## 第一章

一週間

一週間、それが長いか短いか。

それについての間隔は人によって違うし時と場合によっては尚更違う。そして今の彼女の場合は。

「一週間ねえ」

唐持優里亜は自分の部屋で悩んでいた。ジーンズでベッドの上に胡坐をかいてそのうえでゲームをしながら。あれこれと考えていた。茶色に脱色した髪を伸ばしていて顔は丸い。ついでにアーモンドを広げた様なやはり丸い目をしていてそれは少し上に向いている。眉は細く長く口は小さく唇も薄い。背は割かし高く一六五近くはある。全体的にそのジーンズが似合うスタイルだが胸等はあまり目立たない。

その彼女がゲームをしながら考えていた。一週間あるのだ。

「どうしたものかしら」

仕事で有給休暇をとりあえず一週間取った。しかし取ってみて逆に何をするか悩んでいるのだ。

「あいつ呼ぼうかしら」

彼氏を呼ぼうと思った。

それですぐに携帯に電話をかけた。それで相手に声をかけた。

「ねえ、いいかしら」

「何だよ」

「私一週間休みできたのよ」

「仕事首になったのか？」

「違うわよ」

そのあまり質のいいとは思えないジョークにはむっとした声で返した。

「有給取ったのよ」

「何だよ、それで休みなのかよ」  
「一週間ね。それでね」  
「何だ？遊びに来いって言うのか？」  
「そうよ。どうかしら」  
「こっぴつ彼氏に言うのである。」  
「とりあえずね」  
「夜位ならいいけれどな」  
電話の向こうの相手はこっぴつ優里亜に言ってきた。  
「それならな」  
「夜位つて」  
「俺今忙しいんだよ」  
彼は少しむっとした声で言うのだった。  
「仕事がな」  
「そんなに忙しいの」  
「今仕事を二つ受け持ってるんだよ」  
「二つもなの」  
「だからだよ。だから今は無理なんだよ」  
彼はまた言った。  
「悪いな、夜もそれもかなり遅くな」  
「じゃあ昼はどうしろって言うのよ」  
「ゲームでもしたらどうだ？」  
彼はこっぴつ勧めてきた。  
「何か新作買うなりあとDVD買ったりな」  
「ありきたりね」  
「それか旅行でも行ったらどうだ？」  
彼は今度はこれを提案してみせた。  
「何処かにな」  
「旅行ね」  
「御前この前函館に行きたいって行ってたよな」  
「まあね」

そのことを思い出して答えはする。

「何となくだけれど」

「じゃあそこに行って来たらどうだ？」

「今から？」

「一週間あるんだろう？」

「ええ、一週間ね」

「それじゃあ函館に行って帰って来る時間はあるだろ」

その時間を考えての向こうの言葉だった。

「じゃあいいじゃないか」

「函館で遊んで」

「いくらか海栗とか食ってる」

今度は食べ物のことを話した。

「それか蟹か烏賊な」

「海のものばかりね」

「函館っていったらそれだろ」

まさにそれだというのである。それは確かにその通りである。やはり函館といえば海の幸である。それを食べずして函館は語れない。

## 第二章

「だからどうだ？」

「一応考えてはおくわ」

こう答えはした。

「明日一日かけてね」

「御前バイク乗れるな」

「ええ」

実は彼女の趣味の一つである。750CCの大型を乗りこなしているのである。

「そうだけれど」

「ゲームも旅行も嫌なら飲んどろ」

今度はこのことを言われた。

「ビールでもな」

「一週間酒浸りって。何処のアル中なのよ」

「嫌か？」

「太るじゃない」

それを気にしての言葉である。

「ビールだけじゃ済まないし」

「じゃあ酒は駄目か」

「そうね。止めておくわ」

酒浸りの生活は止めるのだった。

「バイクにしても一週間ずつつつてもあれだし」

「それじゃあやっぱり旅行じゃないのか？」

「そうかしら」

「全く。何でまた急にそれだけ有給取ったんだ」

「溜まってたのよ」

だからだというのである。

「気付いたら一週間もね」

「まあ有給は気付いたら溜まるがな」

それは優里亜だけでなく彼も同じだった。忙しい証拠である。

「それじゃあまあ。俺が行くのは夜だけになるけれどな」

「もうどうせだから同棲しない？」

優里亜は不意にこんなことを提案した。

「二人で。どうかしら」

「そうだな。とりあえず今の仕事が終わったらな」

それからだというのである。

「考えるか」

「どっちにしろ一週間は無理なのね」

「だから今忙しいんだよ」

そのことをここでまた言うのだった。

「無理だよ、悪いな」

「そうなの。どっちにしろ一週間ね」

「とりあえずゆっくりしろ」

言葉は少しばかり優しいものになった。

「いいな。それじゃあな」

「ええ、わかったら」

これで彼氏との話は終わった。話を終えて携帯を置いて思うことは。

「無駄に休みだけあってもね」

仕方ないということだった。とりあえず今はぼんやりとゲームをする。そのゲームの進みは順調だったが彼女の心は浮かないものだった。

ゲームをきりのいいところで終えてそれで寝た起きると六時半だった。彼女は寝起きはいい。しかしそれが今はあまり面白く思えない理由になった。

「どうやって過ごそうかしら」

考えながらとりあえずは朝御飯に買っていたジャムパンを牛乳で流し込みながらゲームをした。暫くしてから歯を磨いた。

それが終わっても八時だった。時間はまだまだある。

とりあえずはゲームをしていたが何か飽きたのでパジャマからシャツとジーンズに着替えて上にジャケットを羽織って部屋を出た。そうして向かうのは。

とりあえず街に出ただけだった。しかし出してみるとだった。

ただ歩くだけで本当に何もすることがない。困ったことだ。

「ええと？」

何もすることがなく街中でも困った顔になる。それであれこれ考えているとであった。

ゲームセンターがあつたのでそこでUFOキャッチャーをやった。それからゲームショップに入って新作を買った。ついでに会員に入っているレンタルビデオショップでドラマのDVDを借りた。それで帰ってもまだ昼だった。

それでとりあえず家にあるカップラーメンを食べてまたゲームだった。ゲームをしていると夜になって彼氏の神楽健人が部屋に来た。細い顔をした背の高い若者で強い目の光を放っていてその目は二重で切れ長である。唇は薄く小さい。灰色がかつた様な茶髪の髪は細く量が多くしかも癖がある。身体はかなり痩せている。その彼がやっと彼女の前に姿を現わしたのである。夜になってだ。

「元気か？」

「一応はね」

外出時のジーンズのままベッドの上に座ってゲームをしながら彼に顔を向けて応えた。



### 第三章

「元気よ」

「そうか。それで今日はどうだったんだ？」

「外に出てゲーム買ってね。DVDもレンタルして」

「それだけかよ」

「それだけよ」

本当にそれだけなのだった。

「それでお昼に帰ってこようやって」

「ゲームか」

「恋愛育成ゲームね」

それをしていているというのである。

「ずっとやってるのよ」

「それで面白いか？」

「まあね」

ぼんやりと画面に顔を戻して応える。とはいってもあまり面白くなさそうな顔と声だ。

「それはね」

「いいのか？本当に」

「いいけれど」

「あまりそうは見えねえけれどな」

健人は応えながらその手に持っていたものを床に落とす。それは。

「何よ、それ」

「何よって見ればわかんたろ？」

そう言うのであった。ビニールの中に赤と黄色の模様が見える。

黄色がアーチになっている。優里亜もそれを見て何となくわかった。

「マクドね」

「そっだよ」

まさにそれだというのだ。

「差し入れな」

「ビールは？」

「買って来たよ」

それもあるというのだ。

「御前休みになるとビールだからな」

「気軽に飲めていいのよ」

「だからか」

「そうよ。あんたも飲むでしょ」

「俺はいい」

健人はそれはいいとした。断るのだった。

「それはな」

「いいの」

「ああ、いい」

また断る彼だった。

「別にな」

「何よ、つれないわね」

「だから明日また仕事なんだよ」

部屋のテーブルの前に腰を下ろす。丁度優里亜がいるベッドと画面の間に座る形になった。ガラスのテーブルの上にはネットで調べた攻略について書いたノートやポテトチップスの空けられた袋がある。他にはファッション雑誌やそうしたものもテーブルの周りにある。

そうした雑然とした中に座って。健人は彼女に言った。

「なあ、明日な」

「何？」

「部屋掃除しろよ」

その雑然とした部屋を見回しながらの言葉だった。

「いい加減な」

「掃除？」

「こんなんじゃないやダニ涌くぞ」

だからだというのである。

「ダニがな」

「ダニがなのね」

「そうなたら大変なことになるぞ。喘息とかなりたくないだろ」

「まあそれはね」

「だったら掃除しろ。バイクの手入れは欠かさないのにな」

「ちゃんと一ヶ月に一回掃除してるわよ」

優里亜の口は減らない。

「一応ね」

「毎日しろよ、毎日」

「仕事で疲れてるから無理よ」

「今は休みだろ？」

「いいじゃない。とにかくね」

「ああ」

「明日することは決まったわ」

それは決まったとはいう。しかしであった。

## 第四章

「お掃除して洗濯して」

「洗濯も毎日やってるのか？」

「いいえ」

「それもだというのだ。」

「溜まったらするようになってるわ」

「それも毎日やれよ」

「洗濯は毎日しなくてもいいじゃない」

優里亜はこのことについても随分とずぼらである。何につけてもそんな感じだった。

「全然ね」

「洗濯は毎日しろよな」

健人は惘然とした顔になって彼女に言い返した。

「全くよ。それでも女かよ」

「女とかそういうの関係ないじゃない」

「あるよ」

「何であるの？」

「女つてのは綺麗好きなものだろ、それで洗濯も毎日しないってのはな」

「シャワーは毎日浴びてるわよ」

「ああ言えばこう言うだった。何もかもだ。」

「ちゃんとね」

「それでもだよ。洗濯もな」

「毎日やったら水道代勿体無いし」

「じゃあシャワーも同じだろうが。幾ら洗濯物が少なくてもな、一人でもな」

「やれっというのね」

「そうだよ」

まさにそうだといいのである。健人にしてはだ。

「何なら今から俺がやるぞ」

「いいわよ」

しかし優里亜はそれはいいというのだった。

「それはね」

「そうなのかよ。じゃあ明日は掃除ちゃんとしろよ」

「あと洗濯もよね」

「ベッドの布団も干せよ」

「それも言い加えてきた。」

「ダニが出たら女じゃねえからな」

「一人暮らしの女なんてそんなものよ」

「そうなのかよ」

「寮なんてもつと凄いらしいわよ」

話はそこにも向かうのだった。

「寮とかはね」

「そんなにかよ」

「私は寮に入ったことないけれど」

ゲームはそのまましている。

「それでもね」

「男の寮と同じかよ」

「もう壮絶らしいわ。高校生で女の子ばかりだとね」

「無法地帯か」

「殆どゲームとか漫画の世紀末ね」

「それだというのだ。」

「あちこち荒れ果てていてね」

「花の園じゃねえのかよ」

「そんな訳ないじゃない」

それはあっさりと否定された。見事なまでに。

「全然違うんだって」

「全然か」

「だから。世紀末救世主の世界なのよ」

「何か嫌な世界だな」

「女子寮に幻想持ったら駄目よ」

優里亜はあくまで言う。

「というか女の子にね」

「御前見たらわかるな」

健人は袋からハンバーガーを取り出しながら述べた。

「それはな」

「何か引つ掛かる言い方ね」

「そういう風に言っただよ」

彼もこんな風に返す。

「ったくよ。それで明日は掃除なんだな」

「そうするわ。あとは」

「ゲームか、今みたいに」

「それとDVDね」

どちらにしてもインドアであった。それは変わらない。

## 第五章

「明日もね」

「何か金のない休みたいだな」

「そこそこ遊べるだけはあるけれどね」

「それでもというのである。今は。」

「それでもよ。何かどうにもね」

「自堕落な感じだな」

「別にいいじゃない。とにかくね」

「明日は掃除だな」

「ええ、やるわ」

それを言っただであった。この日の夜は二人で過ごした。そうして次の日は実際に起きて暫くしてから掃除をした。掛け布団も干してこの日は清潔な生活だった。

そして午後はまたゲームとDVDだった。昼食は適当である。夕食の時間になるとまた健人が来てビールと一緒にその夕食を持って来たのだった。

「今日は何なの？」

「焼きそばな」

「それだというのだ。」

「あとお好み焼きな。それ買って来た」

「それとビールよね」

「ああ、俺は今日も飲まないけれどな」

「そうなの。今日もなのね」

「何か買って来たものばかりじゃあれだな」

「今日もテーブルのところ座りながらの言葉だった。」

「健康的に何か作らないか？」

「あんた料理できるの」

「熱いのは苦手だけれどな」

それは無理だという健人だった。言いながら夕食やビールと一緒に買って来た漫画雑誌を開いている。そのうえで読んでいるのである。

「一応はできる」

「私もだけだね」

優里亜は相変わらずベッドの上に座ったうえでゲームをしている。そうしながらの言葉だった。着ているのも同じジーンズである。ズボンが多い。

「それは」

「御前料理できたのかよ」

「何度も食べてるじゃない」

少しむっとしながら彼に言葉を返す。ただし視線はゲームをしているテレビの画面を見たままだ。

「オムライスなりカレーライスなりハヤシライスなり親子丼なり」

「飯系統ばかりだな」

「他にはそーきそばとかからーめんとかおうどんとかおそばとかスパゲティとか」

「今度は麺類かよ」

「そーというのが得意なのよ」

「そーだというのである。」

「どうかしら、それで」

「別にいいけれどおかずはないのかよ」

「それもできるわよ」

「こーは答えるのだった。」

「一応はね」

「一応かよ」

「まあ作れるから安心して」

「それはできるとのことだ。」

「じゃあ明日はそれね」

「ああ、美味しいもの作って食ってる」



「あんたの分も作っておくから」

彼の分もだという。この辺りは流石に付き合っているだけはある。随分とくだけているどころか倦怠期めいたものさえ漂ってはいるのである。

「それでいいわよね」

「悪いな、それじゃあな」

「明日は確か」

ここで優里亜は明日についてさらに語った。

「木曜だったかしら」

「金曜だよ」

雑誌を読みながら答える健人だった。

「この雑誌チャンピオンだからわかるだろ」

「チャンピオンって金曜じゃなかったの？」

「木曜だよ。何かと勘違いしてないか？」

「そうだったかしら。それじゃあ明日の夜からは暫く二人ね」

「そうだな。じゃあ明日は気合入れるか」

健人は不意にこんなことも言った。

## 第六章

「ちよつとな」

「気合つて？」

「こつちの話だよ、気にするなよ」

今はこう言うだけだった。

「明日になればわかるかも知れないからな」

「明日ね」

「ああ、明日な」

あくまで明日だというのである。

「じゃあな。またな」

「ええ、明日ね」

こんな話をして夜の時間を潰すのだった。そして次の日優里亜はゲームを楽しんだ。ゲームを楽しんでから昼近くになって料理をするのだった。

野菜をふんだんに用意した。スーパーに出て買ったものだ。シーフードにトマトにセロリ、大蒜等を買いそのうえで野菜を切って料理をするのだった。

それからだった。料理をしてだ。昼になると見事な料理が出来たのはトマトやセロリに大蒜にマッシュルームを入れたものをソースにしたマカロニにシーフードにトマトとガーリック、それと唐辛子で味付けしたものだ。イタリア風の料理を作ったのである。

それを食べて昼は時間を過ごした。それからだった。

またゲームをする。そして夜になるとまたであった。健人が来た。

「仕事終わったぞ」

「じゃあ日曜までいけるわね」

「いや、御前休み火曜までだったよな」

「ええ」

「その日までいられるようになった」

「ここでこう言ったのだ。」

「火曜までな。いられるようになったからな」

「火曜までって。仕事結構抱えてたんじゃなかったの?」

「いつも通りベッドの上に座ってゲームをしながらだ。そこから彼に問うた。」

「確か」

「だから終わらせたんだよ」

健人はまた優里亜に告げた。

「仕事をな」

「今か変えてるの全部?」

「ああ、気合入れて終わらせた」

そうしたというのである。

「それで俺も有給取ったんだよ」

「そうだったんだ」

「それでだけれどな」

ここまで話してから優里亜にまた言うてきた。

「いいか?明日からな」

「何処に行くの?」

「二人だからな。何処がいいんだ?」

「何か食べたい」

やはりゲームをしながらの言葉だった。

「何かね」

「じゃあ何処かに行くか?」

「中華街なんてどう?」

優里亜はそこを話に出してみせた。

「そこで食べ歩きなんてのは」

「熱いのは駄目なんだけれどな」

「少し冷やしてからだったらいいでしょ」

「まあそれだとな」

そう言われると健人にしても異論はなかった。

「じゃあそれで決まりか」

「横浜だったら近いし」

「日帰りで行けるな」

「日帰りじゃなくてよ」

それは違うのだという。ゲームをしながらで少しぼんやりとした感じの言葉だったがそこはしっかりと彼に対して言うのであった。

「ちゃんとした旅行でね」

「三泊四日か」

「ホテルどうするかまだ決めてないけれど」

「そんなのシティホテルでいいだろ」

健人は実に素っ気無く答えた。

「それかラブホでも泊まるか？」

「それもあからさまよね」

優里亜はそれには今一つ賛成しない顔になった。

## 第七章

「どうもね」

「けれどよ、横浜のそうしたホテルってよ」

「どうなの？」

「かなりいいらしいな」

健人はこのことを彼女に話すのだった。

「洒落てていい感じだったよ」

「ええと、一泊で八千円位よね」

「まあそんなところだな」

「一人四千円ね」

「一泊だとそんなものじゃねえのか？」

「確かにね」

言われてその言葉に頷く優里亜だった。

「じゃあシティホテルかそこに泊まって」

「それでいいだろ」

「そうね。じゃあそうするわ」

「明日の朝からだな」

話はこれで終わりだった。その日は二人で優里亜の家で休んでそれからだった。二人で横浜への電車に乗ってそこへ向かうのであった。

横浜に向かうその電車の中で。優里亜は健人に対して尋ねた。土曜の朝は平日に比べて人がかなり少ない。その中で二人並んで席に座って話をするのだった。

「横浜かあ」

「言ったことあるだろ」

「結構ね」

それはあると答える。

「好きな街よ。お洒落だし食べる場所も一杯あるし」

「そこでやつぱり食うことが出て来るんだな」

「やつぱりね。それはね」

それを否定しない彼女だった。

「出て来て当たり前じゃない。中華街行くんでしょ？」

「ああ、まずはそこだな」

「それだったらやつぱりそうじゃない。食べるんじゃない」

「それはそうだけれどな。それで何食うんだ？」

「広東料理」

優里亜は一言で答えた。

「それ貰うわ」

「広東料理かよ」

「あれが一番美味しいじゃない、中華料理じゃ」

「俺も好きだけれどな。まあ熱くないのがいいな」

「中華料理は全部火を使うけれど」

そのことを指摘する優里亜だった。それは忘れない。

「それでそんなこと言ってどうするのよ」

「少し時間を置いて冷ましてから食うんだよ」

「何かあまり美味しくなさそうね、それって」

「俺はそれで美味いんだよ」

「やれやれ、相変わらずね」

優里亜はそれを聞いて少し呆れた顔になった。荷物は自分の上に置いてある。彼女だけでなく健人もそこに置いてそれで二人並んで座っているのだ。緑の席にだ。

「その猫舌は」

「悪いかよ」

「別にいいけれど。まあラーメンはのびないように気をつけてね」

それは言うのだった。ラーメンはのびたら食べられたものではない。優里亜はラーメンが時間が経ってそれでのびることを言っているのである。

「それはね」

「一応わかってるよ」

「やれやれ。この四日間大丈夫かしら」

優里亜は今度はこんなことを言った。

「こんな調子で」

「何だよ、そこまで言うのかよ」

「まあ残り四日ね」

その一週間の残り四日である。そのことの話にもなった。

## 第八章

「楽しみましょう、二人で」

「一人でいるよりいいのか？」

「いいわよ、当たり前でしょ」

それは当然だというのだ。少し懽然とした顔のままだったがそれでも彼女は言うのだった。

「それは」

「まあ一人でいるより二人かよ」

「そういうことよ。じゃあまずは中華街ね」

「ああ」

とにかくまずは食べることにするのだった。何につけてもだ。

「そこに行つてね。ラーメンと点心食べましょう」

「熱いのは駄目だけれどな」

「だから冷ませばいいでしょう？」

またその話になった。優里亜の顔が懽然としたものになる。

「それはね」

「わかつてるけれどよ、まあ行くか」

「ええ、それじゃあね」

「一週間。何だかんだで」

健人がここでまた話した。

「楽しいか？」

「楽しいことは確かよ」

それはすぐに認める優里亜だった。

「それはね」

「じゃあいいんじゃないか？正直どう過ごそうか困ってたたる」

「まあね。お休み取ったのはいいけれどね」

「時間を持って余すのもよくないしな」

「確かにね」



そのことには賛成した。言われるまでもなくだ。彼女にしてもそうした時間の過ごし方はあまり好きではない。最初の三日は何とかそれをしないように苦労したのである。

そうして今は彼と一緒にいて。それで話すのだった。

「なあ」

「何？」

「俺時間見てアパート引き払うな」

「同居するってこと？」

「そっちの方がいいだろ」

「こう言うのだった。」

「二人で暮らした方が退屈じゃないだろ」

「まあね。他にも何かと助かるし」

「それじゃあそれでいいな。一緒にな」

「ええ、じゃあ一緒にね」

「住もうぜ。これで休みになってもあれこれ考えなくてもいいだろ」

「そうね。少しはね」

こんな話をしながら横浜に向かう二人だった。そして横浜でその二人で楽しい時間を過ごすのであった。一週間の後半はそれまでとは違っていた。やはり二人だからであった。

その二人きりの時間を過ごした後で家に帰った。家の扉まで健人に送ってもらった。家に帰ったその時はもう夕方になっていた。

「ふう」

部屋に入ってまずは大きく息を吐き出してそうしてシャワーを浴びて寝る時のジャージになってである。そうして夕食にカップうどんを食べてまたゲームをする。その顔はにこにことしていた。

「じゃあまた明日から」

ゲームをしながら言う。

「お仕事もあいつとのことも頑張るか」

何だかんだで充実した一週間であった。優里亜は満ち足りた顔でこれからの生活に戻るのであった。充実した一週間で後で

一週間

完

2009.12.22

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6624k/>

---

一週間

2010年10月8日15時12分発行